【土木計画学研究・論文集　No.16　1999年9月】

水辺におけるアメニティの変遷に関する研究 ― 京都鴨川の納涼床を対象として ―

Transition of the Design for Amenity in the River-front - Case Study on the Kamo River, Kyoto -

田中尚人[*1]・川崎雅史[*2]・牧田　通[*3]

by Naoto TANAKA , Masashi KAWASAKI and Toru MAKITA

1．研究の背景と目的

京都の市街地を流れる鴨川では古くから、この暴れ川の治水と並立して、「納涼床（のうりょうゆか）」に象徴されるような親水の機能が治水上の必要条件を満たしつつ保たれてきた。その姿は、治水や利水を目的とした河川改修とともに幾度かの変容を経てきたが、都市と水辺、人が水に親しく接する基本的な関係は長年に渡り変化していないものと思われる。

そこで本研究は、納涼床を中心とした鴨川の景観の歴史的な変遷を河川改修との関わりから考察し、京都鴨川において、河川の備えるべき本来的な機能を強化しながらも、人々が水辺に求めるアメニティを保持してきた土木技術の知恵を探ることを目的とした。

鴨川の納涼床を対象とした既往研究としては、建築的な視点から納涼床を分析した山崎らの報告[1]がある。本研究の特徴は、水辺のアメニティの成立基盤を、建造物や景観要素の変遷だけでなく、これまで焦点の当たりにくかった治水や利水による河川の空間的構造との関わりから論ずるところにある。このような、河川本来の機能に注目したアメニティの研究の先駆けとして、戦前の鴨川の改修工事における環境計画の理念の高さを指摘した松浦・島谷らの研究[2) 3)]の意義は深く、本研究もこれに負うところが大きい。

本研究では歴史的な文献や資料[4) 5) 6) 7) 8)]、絵図・写真等、ヒアリング調査をもとに、納涼床を中心とした河川景観の変遷を調査・整理した。特に、鴨川においては納涼床が出されるみそゝぎ川[9]との関わりについての考察を行った。また、鴨川の納涼床と同様に夏期にのみ「川床（かわどこ）」が出される京都市山間部を流れる貴船川についても調査を行い、鴨川納涼床に共通する川と人の接し方、考え方を抽出した。

2．鴨川の空間的構造の変遷

本章では、鴨川の空間的構造を歴史的に把握するために、築堤や浚渫等の主要な河川改修の歴史を、京都府京都土木事務所、京都府立総合資料館より収集した

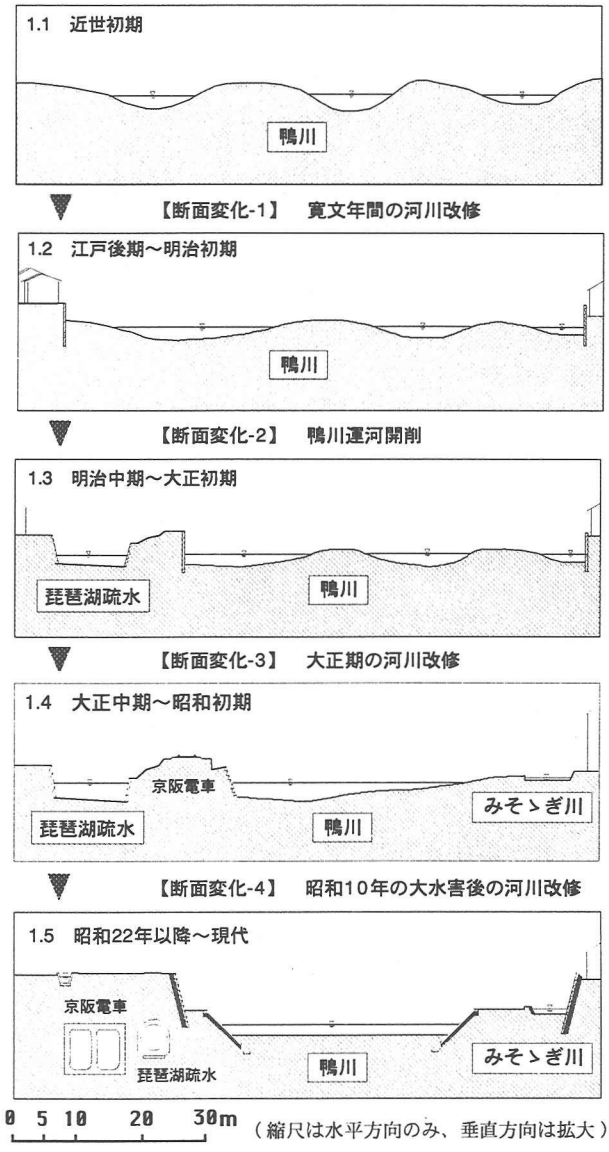


図-1 鴨川四条河原付近の河道断面の変遷（筆者作成）

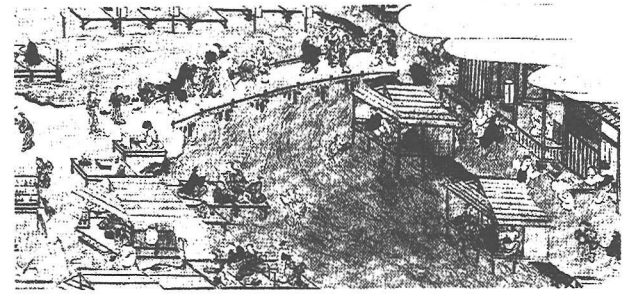


図-2 『芭蕉翁絵詞伝（義仲寺）』
（「京の歴史と文化５洛 朝廷と幕府」[15]より）

キーワード：景観、余暇・空間設計、河川計画

＊1　正会員　修士（工）　京都大学大学院 工学研究科 助手
（〒606-8501　京都市左京区吉田本町　TEL & FAX　075-753-5123）
＊2　正会員　博士（工）　京都大学大学院 工学研究科 助教授
＊3　学生員　京都大学大学院 工学研究科 修士課程

『京都市水害史』[10]や、鴨川の治水に関する文献・資料[11)12)]から整理し、鴨川四条河原付近の河道断面の変化を**図-1**のようにまとめた。

鴨川の空間的構造に大きな影響を与えた河川改修には以下の４つがある。

（1）断面変化-1　【図-1.1 →1.2】

寛文年間の河川改修　幕府により寛文年間（1661～72）鴨川筋に新堤（寛文新堤）の築造が行われた。北は二条から南は五条に渡る両岸には、1700年前後に描かれた『芭蕉翁絵詞伝』（**図-2**）に見られるような石積みの護岸が築かれ、河道の整形、河床の浚渫等が行われた。それ以前は不明瞭であった川幅がある程度固定されると同時に狭まり、河原と市街地の区分が明確となった。また、これが契機となり現在の祇園や先斗町等の盛り場へと発展する地区の基礎が形成された。

（2）断面変化-2　【図-1.2 →1.3】

鴨川運河開削　明治23年（1890）４月に完成した琵琶湖疏水が夷川舟溜までの鴨東運河を経て、冷泉通りより南下して鴨川と並走する鴨川運河が完成したのが、明治27年（1884）９月であった。鴨川運河（**図-3**）は鴨川の川原の中に新たに堀割られる形で造られ、京都～伏見間をつなぐ舟運路として活躍した。大正４年（1915）には京阪電鉄の五条～三条間の開通とともに、三条通り以南の鴨川左岸に桜並木が植樹された。

左）図-3 鴨川運河　昭和５年、団栗橋付近
（「写真集成京都百年パノラマ館」[8)]より）
右）図-4 鴨川の様子　明治末頃、丸太町橋付近
（「京都慕情」[4)]より）

（3）断面変化-3　【図-1.3 →1.4】

大正期の河川改修　明治後期（**図-4**）から大正、昭和初期にかけて鴨川は比較的安定しており洪水の被害は軽微であったとされている。この時期、明治後期から京都の都市化は急速に進展し、一連の河道改修の結果、河床の浚渫、低水路内の中洲の除去、右岸に高水敷が築造され流れが一つにまとめられた。また、みそゝぎ川の発生もこの時期と考えられる。

（4）断面変化-4　【図-1.4 →1.5】

昭和10年の大水害後の河川改修　昭和10年（1935）６月、前年９月の室戸台風による被害の復旧工事も十分でなかった鴨川を集中豪雨が襲い、同年８月にも洪水の被害を出した、いわゆる「鴨川大洪水」が起きた。京都市の27％が浸水し、死傷者・行方不明者合計74名、全壊・半壊・流失家屋675戸[13)]、堤防決壊284ヶ所、橋梁の流失57橋であった。この大水害後の災害復旧により鴨川の空間的構造は大きく変化し、河床は約２ｍ程度掘り下げられ、55カ所の床止め工、最大10mの河道の拡幅や、橋梁架設が行われ、改修工事竣工は戦後の昭和22年（1947）となった[14)]。

３．鴨川の納涼床の形態の変遷

納涼床は今日のような形態となるまでに、幾度かの変化が見られる。本章では、納涼床が発生した近世初期からの文献や資料、絵図・写真等、また納涼床を出している先斗町界隈の店舗に対して行ったヒアリング調査をもとに、納涼床の形態の変遷を、前章の鴨川の空間的構造の変遷との関係から考察した。

図-5は**図-1**の断面変化と対応させて納涼床の配置の変遷を示したものである。

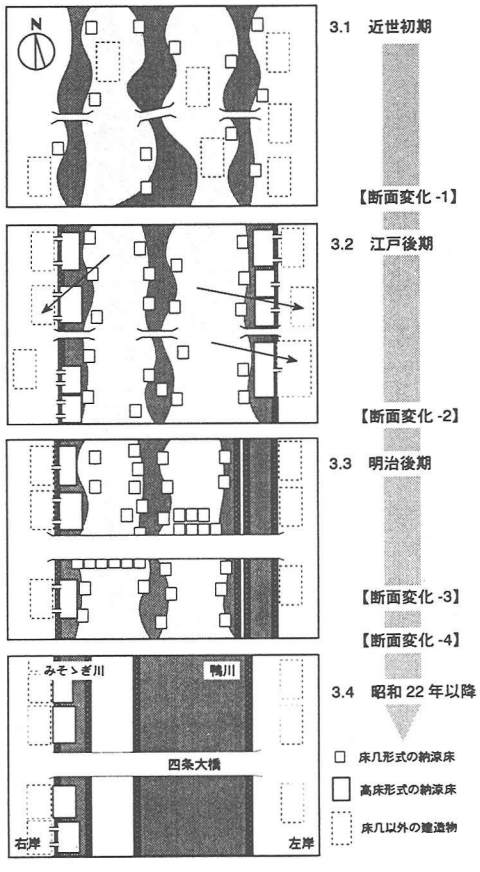


図-5 納涼床の配置の変遷（模式図筆者作成）

（1）納涼床の発生以前

鴨川は古来より暴れ川として有名で、その流路は不特定であり、両岸に荒涼とした河原が形成されてきた。この河原は、時に合戦の場ともなり、衆庶往来の広場的な性格を持つ場となっていた。室町時代の鴨川の河原を描いた絵図に『洛中洛外図（町田家旧蔵本）』（**図-6**）があり、そこには河原と市街地には明確な区別のない様子が見てとれる。

河原の広場化は近世に入ると豊臣秀吉による京都改造等の影響で著しくなり、寛永年間（1615～44）の賑わいの様子を描いた『四条河原図』（**図-7**）では、河原は専ら歌舞伎の興業地と化していた。

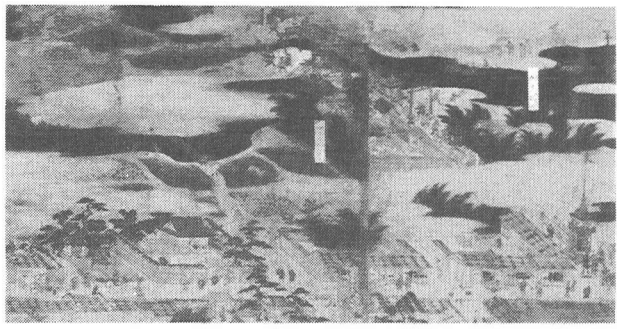


図-6 『洛中洛外図（町田家旧蔵本）』
（「京の都市意匠― 景観形成の伝統」[5] より）

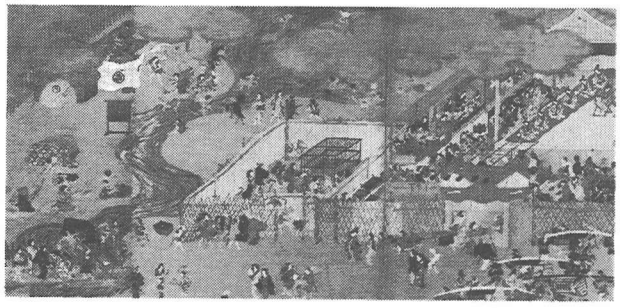


図-7 『四条河原図』（「京都古地図散歩」[6] より）

（2）納涼床の発生― 床几形式 ―

a） 床几形式の納涼床

「四条河原涼み」として祇園会の期間である６月７日から18日まで期日の定められた年中行事であった四条河原の納涼における発生当初の納涼床の形態は、『賀茂川納涼図』（**図-8**）などに描かれる様に、現在とは大きく異なり水面との距離が非常に近く、持ち運びが可能な床几形式のものであった。設置場所も中洲や水際、時には川の中と河原全体に渡って並べられていた（**図-5 3.1** 参照）。床几形式の納涼床は、当時の技術力からすれば無理に常設の装置をつくるのではなく、持ち運び可能な仮設の装置で水辺を楽しむという、しなやかな考え方を具現化した納涼の工夫と言えよう。

図-8 『賀茂川納涼図』
（「京の都市意匠― 景観形成の伝統」[5] より）

（3）納涼床の確立 ― 高床形式・床几形式 ―

a） 高床形式の納涼床

寛文年間（1661～72）の河川改修後（**断面変化-1**）石積みの護岸ができたことで、河岸（堤防）と水面との距離が以前より大きくなり、足の長い束柱を持った高床形式の納涼床が河岸から張り出されるようになった。この様子は『芭蕉翁絵詞伝』（**図-2**）にも描かれている。

b） 区分化による配置の変化

寛文年間の河川改修後、護岸により河原と市街地が明確に区分化された四条河原周辺では、歌舞伎小屋等の常設的な店舗は安全な堤内地へ移り、河原には茶屋や的矢等の仮設的な店が納涼床とともに次第に増えていったと考えられる（**図-5 3.2** 参照）。この時期の様子は、安永９年（1780）の『都名所図会』（**図-9**）等に見ることができる。

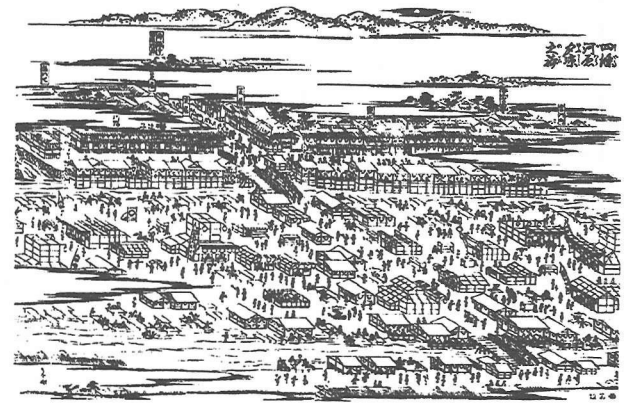


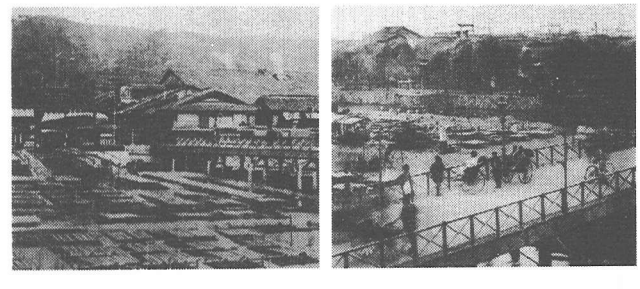
図-9 『都名所図会』（「都名所図絵を読む」[7] より）

c） 期間の延長

年中行事であった四条河原の納涼は、本居宣長が著した『在京日記』にも宝暦７年（1757）「近年、後涼みといひて、八朔迄はすずみのやうに茶屋茶屋の川床もあり、又石垣、川端など、川原へ床几、茶見せい出しなどして、川原いとにぎはし」との記述が見られ[15]、江戸中期のある時期から祇園会の期間を過ぎても８月１日までは納涼の期間が延長され、明治期になると納涼床は、７～８月の２ヶ月間出されることが定着した。これは、納涼床の一般民衆への定着を示すものであろう。明治10年（1877）撮影の写真（**図-10**）には、河原一面に床几形式の納涼床が置かれていた様子が写っている。

d） 左岸の納涼床の消失

鴨川運河が開削（**断面変化-2**）されると、運河に占有されることになった鴨川左岸から出されていた高床形式の納涼床は姿を消し現在のように、右岸からのみとなった（**図-5 3.3** 参照）。運河開通以前の明治25年（1824）撮影の写真（**図-11**）では、左岸からも高床形式の納涼床が出されていた様子が分かる。



左） 図-10 明治10年 四条大橋上流右岸から東南隅を見る
（「京都慕情」[4] より）
右） 図-11 明治25年 四条大橋下流右岸から東北隅を見る
（「写真集成京都百年パノラマ館」[8] より）

（4）大正・昭和初期の納涼床 ― 高床形式 ―

a） 床几形式の納涼床の消失

大正期の河道改修（**断面変化-3**）の結果、中洲が取り除かれ、流速も速くなった河道内に直接納涼床を出すのは危険であると、床几形式の納涼床が禁止された。また、右岸には高水敷を設けることが計画されたが、鴨川の流れが遠のき、納涼床が出せなくなることを憂えた木屋町・先斗町の店々が、大正６年（1917）９月「夏の納涼床下に清水を通ずるなどの設備されたし」と京都府に陳情した[16]。結局その陳情が実を結び、右岸の高水敷の最も堤防寄り、河岸の建物のすぐ脇にみそゝぎ川が開削された。

b） アメニティの基盤としてのみそゝぎ川の誕生

元来この「みそゝぎ川」の名称は、中州によっていくつにも分けられていた鴨川の流れのうち、最も右岸寄りの流れであったらしく、古来より禊ぎの儀式が行われる等、人々と深く関わってきた水辺だったのであろう。明治期・大正期の治水を第一の目的とした河川改修の中でもみそゝぎ川は、鴨川の余剰水排除（治水）、高瀬川舟運への水の安定供給（利水）、納涼床の存続（親水）など、都市の人々の生活に潤いを与えるアメニティの基盤施設として誕生したのであった。以後、鴨川の右岸より高床形式の納涼床だけが、このみそゝぎ川に脚をつけて出されることとなった。

c） 景観としての納涼床

明治末から、納涼床は二階建てや思い思いの屋根をつけ、形状が不揃いで不体裁を極めた。この様な納涼床の景観を整えるため大正12年（1923）『鴨川河川敷一階占用並びに工作物施設の件』が通達され納涼床の基準が規定された[17]。このような納涼床に対しての新たな景観規制は、納涼床がそれ以前の鴨川や東山を「見る」ための装置としての性格に加え、まとまった群として先斗町の建築群と併せて鴨川の河川景観の構成要素として重要な意味を持つ「見られる」対象となったことを示している。

d） 納涼床の接続方法の変化

昭和10年（1935）の大水害以前は、多くの納涼床は店舗とは小橋によってのみつながれる形態をとっていたが、これは洪水時に納涼床が流されても、店舗までが一緒に流されてしまうことを防ぐ設計であった。小橋による納涼床と店舗との接続方法は、洪水という自然の驚異が人々の力だけでは如何ともし難かった時代のしなやかなフェイル・セイフの設計思想として評価に値する。現在は、納涼床の店舗側の一辺を全て密着させる接続方法が主流である（**図-12** 参照）。このような接続方法の変化には、種々の原因が考えられるが、昭和10年の大水害後の河川改修（**断面変化-4**）により洪水の危険が高い鴨川本流ではなく、流量や流速の調節が可能となったみそゝぎ川に納涼床が出されるようになった影響が大きい。つまり、以前は小橋が果たしていたフェイル・セイフの機能を納涼床を受け入れるみそゝぎ川自身が果たしていると言える。

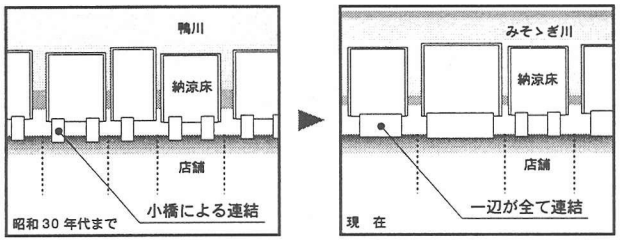


図-12 納涼床の接続方法の変化（筆者作成）

（5）現在の納涼床

昭和10年の大水害後も66軒の店から張り出されていた納涼床は、太平洋戦争による灯火管制のため禁じられ、終戦時には全く影をひそめてしまった。

戦後になり、昭和25年（1950）に数軒が納涼床の設置を出願したが、戦後の反動として鴨川の風致を破壊するようなものが多く出た。このため翌昭和26年（1951）４月から京都府議会で協議会がもたれ、同年５月には許可基準を示した『鴨川の高床について』の通達が出された。さらに翌昭和27年（1952）許可基準の検訂が行われ、同年５月『鴨川納涼床について』の通達（**図-13** 参照）が出された。その後今日に至るまで許可基準の正式な変更はなく、現在、納涼床の期間は６月１日から９月15日までの約３ヶ月間であり、鴨川右岸二条大橋から五条大橋までの約２kmに渡り、平成10年（1998）には52軒の店が納涼床を出した。

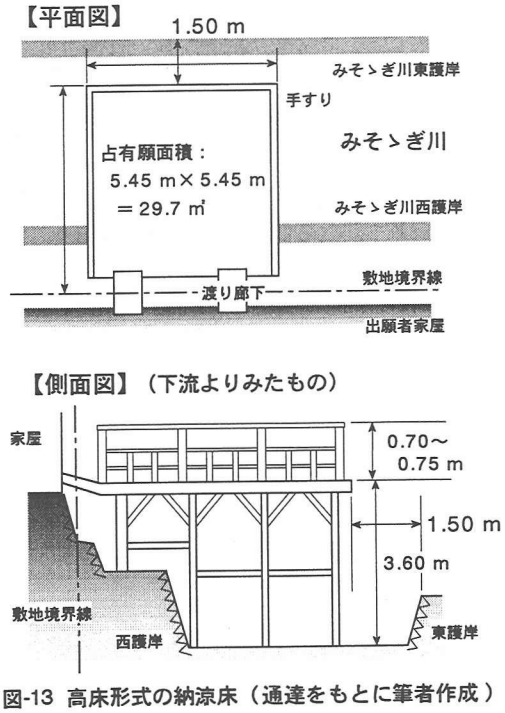


図-13 高床形式の納涼床（通達をもとに筆者作成）

4． 貴船の川床

市街地の中心において納涼床が出される鴨川の上流、京都市左京区の山間部を流れる貴船川においても鴨川同様に「川床」（**図-14**）と呼ばれる仮設構造物が、夏期に川を跨ぐ形で張り出される。

この川床では、納涼床と同じ類型のアメニティが提供されているが、人と川との間により直接的な関係が

見られるので、実地踏査、ヒアリング調査[18]をもとに考察を行った。

(1) 川床の発生

川床の発生は納涼の意味もあったが、山村である貴船では京都の市街地から戻ってくる、いわゆる「薮入り」の際に近隣の人々をもてなす風習として発生したと言われている。当時、各戸は床几を一つずつ所有しており、それを貸し借りして多くの人数に対応した。図-15に示す様な急峻な地形に存在する貴船では、人々の生活は貴船川と強く結びついており、コミュニケーションの場も川原であったと言える。

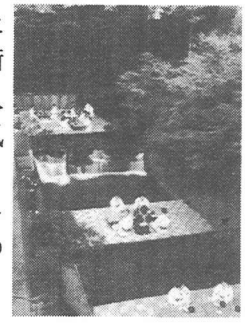


図-14 貴船の川床
(貴船観光会提供)

その発展には、全国に多くの分社を持つ貴船神社の存在が大きな影響を及ぼした。貴船神社の例祭(6月1日)には全国から参詣者が集まり、祭典後の「直会(なおらい:神と食事をするという祭の一部)」には氏子衆はこれらの人々をもてなすため、貴船川に床几を並べ料理を振る舞ったという。

図-15 貴船川
(H.10 筆者撮影)

(2) コミュニティの存在

このように貴船川における川床は貴船神社の氏子として結束の強いコミュニティの存在に立脚したシステムであると言える。もともと22戸であった氏子は現在もほとんどが貴船川沿いで飲食業を営んでいる。

古来「樹生嶺」と書き表されたともいう貴船は、周囲を国有林で覆われ、「木を守ることが水を守ることに繋がっている」との認識を村全体で持ち合わせ、そのような意思統一が川床というシステムを育んだという。また、このような意思統一は貴船川にも注がれており、川床の出し入れは毎日川との相談で行い、万一の事態の発生を未然に防いでいる。後冷泉天皇永承元年7月の出水により社殿(現在の奥宮)が流損[19]するほどの洪水を起こすこともある貴船川は、古来より村の人々にとって恐ろしい自然の脅威でありながら、多くの恩恵を与えるものであり続け、その象徴として現在も川床が存在し続けていると言える。

5. 結論

本研究では、歴史的な資料や文献、絵図や写真、ヒアリング調査等をもとに、納涼床の形態と鴨川の空間的構造の関係を整理した。これをまとめると図-16のように示すことができる。

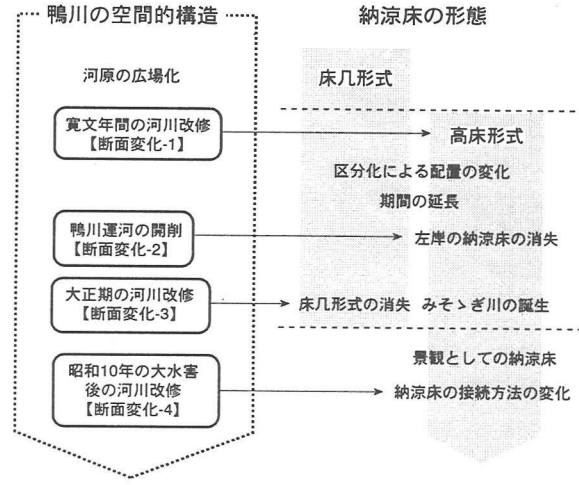


図-16 納涼床の形態と鴨川の空間的構造の関係

『洛中洛外図』(図-6)の描写には都市と川原の区別はなく茫洋としていたが、文政9年(1826)の『四条河原図』(図-7)になると、広場化した河原に人々が賑わいを求め大勢押し寄せている。そして『賀茂川納涼図』(図-8)に描かれる様に、床几形式の納涼床の発生により、人々は以前に増して思い思いに河川との関わりを求めるようになった。

寛文年間(1661〜72)の河川改修により『芭蕉翁絵詞伝』(図-2)に見られるような石積の護岸が築造されると水面からの距離を補うように高床形式の納涼床が出されるようになり、『都名所図絵』(図-9)に見られるような盛況を呈した。

明治27年(1894)の鴨川運河の開削(図-3)により、左岸側から高床形式の納涼床は消失し、大正期の河川改修により床几形式の納涼床は姿を消したが、東山を背景に、鴨川を俯瞰景として眺めることができる納涼床の盛況ぶりは現在(図-17)へと至る。

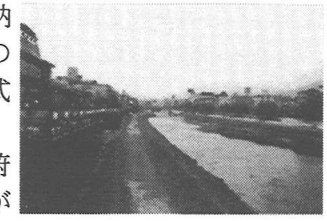


図-17 現在の納涼床
(H.10 筆者撮影)

以上の成果を踏まえ、最後に水辺のアメニティを考える上で重要な示唆を与えると思われる事項を研究の結論としてまとめた。

(1) 「辺(ほとり)」を創る

鴨川の横断面の変遷を概観してみると明らかなように、河川空間の中で現代に至るまで縮小されてきたのは、河川と都市の境界、つまり辺であった。その様な過程において、鴨川の高水敷に設けられたみそゝぎ川は治水・利水・親水全てのアメニティを支える、鴨川と都市の緩衝域として築造された。このみそゝぎ川の存在は、河川デザインにおける「辺」の復権、境界を大切にする設計の指針となると考える。

(2) 「仮設」であること

納涼床も川床も、ともにそれぞれの河川のスケールにあった仮設構造物であり、移動可能であった床几形式の仮設性をよく受け継いでいると言える。この特徴

は、鴨川の場合、以前は納涼床の接続方法に、現在ではみそゝぎ川の機能に、貴船川の場合、川床の設置において日々の出し入れが可能であることに代表されるしなやかな「仮設」の設計思想に結びつくと考える。

自然に対する畏敬の念ときめ細やかな観察に基づいた境界を大切にする納涼の知恵は、今後の河川計画やデザインにも大きな示唆を与えると考える。治水を基盤とした空間的・時間的な境界への配慮は「仮設」の設計思想により潤いのある構造物・システムとして存在可能となり、これは現在の遊水地や河畔林の見直しに代表されるような変動を許容する空間づくりに繋がるものと考えられる。

このように鴨川・貴船川に存在している風土、つまり納涼の構造物・システムを保持してきた土木技術とともに、その環境を享受する人々の自然との関わり方が保持されていくことが、今後望まれる。

謝辞

本研究には多くの方々の御協力をいただいた。京都大学大学院工学研究科中村良夫教授には貴重な御指導を賜った。同大学大学院河川工学分野村本嘉雄教授、細田尚助教授には鴨川の治水に関する貴重な資料、アドバイスをいただいた。京都府京都土木事務所、京都府立歴史資料館の皆様には文献資料の収集に関して御支援をいただいた。そして鴨涯保勝会会長森川良彦様や先斗町・木屋町で納涼床を出しておられる店舗の皆様、貴船神社宮司高井和大様、貴船観光会会長九谷林造様ら多くの方々にはヒアリング調査において多大なる御協力をいただいた。ここに深謝の意を表す。

参考・引用文献、補注

1) 山崎正史：鴨川と町なみ景観、京都市都市景観整備ローカルプラン調査報告書、京都市計画局、1989.3
2) 松浦茂樹：戦前の鴨川改修計画における環境面の配慮、第７回日本土木史研究発表会論文集、pp.275-286、土木学会、1987.6
3) 松浦茂樹・島谷幸宏：水辺空間の魅力と創造、pp.91-95、pp.186-196、鹿島出版会、1987.12
4) 田中泰彦ら編：京都慕情、京を語る会、1974.8
5) 山崎正史編：京の都市意匠― 景観形成の伝統、PROCESS Architecture 116、1994.4
6) 伊東宗裕編：京都古地図散歩、別冊太陽 SUMMER 1994、平凡社、1994.9
7) 宗政五十緒編：都名所図絵を読む、東京堂出版、1997.3
8) 吉田光邦監修・白幡洋三郎ら編：写真集成京都百年パノラマ館、淡交社、1992.7
9) 鴨川右岸の高水敷を流れる人工の小川の名称、京都府：鴨川及高野川改修計畫竝に鴨川改修に附帯する事業計畫、1938.7　にて初見
10) 京都市：京都市水害史、1936
11) 村本嘉雄：河川と都市の歴史―京都鴨川の水害と治水、河川、（社）日本河川協会、1992.6
12) 中島暢太郎：鴨川水害史(1)、京都大学防災研究所年報第26号、B-2、1983
13) 京都府：昭和十年六月二十九日鴨川未曾有の大洪水と舊都復興計畫、1935.11
14) 建設省近畿地方建設局編：淀川百年史、pp.605-607、1974.10
15) 村井康彦編：京の歴史と文化５ 洛朝廷と幕府、pp.203-236、講談社、1994.7
16) 京都府：京都府百年の年表７建設・交通・通信編、1970
17) 大正12年6月14日京都府議会決定 京都府土木建築部河港課：鴨川の変遷、pp.11-13、1958.9
18) ヒアリング調査は、1998.10～11月にかけて３度行った。御協力いただいたのは、貴船観光会会長九谷林造氏、同会藤谷平男氏、貴船神社宮司高井和大氏の３名。
19) 貴船神社社務所：貴船神社要誌

水辺におけるアメニティの変遷に関する研究 ― 京都鴨川の納涼床を対象として ―

田中尚人・川崎雅史・牧田　通

本研究は、文献や資料、絵図・写真等、ヒアリング調査をもとに、納涼床を中心とした鴨川の景観の変遷を河川改修との関わりから考察し、河川の備えるべき本来的な治水機能を強化しながらも、人々が水辺に求めるアメニティを保持してきた土木技術の知恵を探った。結論として、人々は都市と河川の境界としての水辺に注意を払い、河川の空間的変化に対しては、緩衝域となるような人工水路を挿入したり、仮設的な装置を用いることによってアメニティを享受してきたことが分かった。

Transition of the Design for Amenity in the River-Front - Case Study on the Kamo River, Kyoto -

by Naoto TANAKA , Masashi KAWASAKI and Toru MAKITA

"Noryo-yuka", which is temporary water terrace looking on the river, has been succeeded in the Kamo River, Kyoto. The traditional water terrace has aroused public behavior to the river, and created the proper landscape. This paper aims to make clear the knowledge maintaining amenity in the river-front based on the relations between transformations of water terrace and river improvement works. As a result, people have especially designed the boundary space between the city and the river, and enjoyed staying there by making buffer equipments and using temporary devices.